

第4回 小豆島町総合教育会議

【日時・場所】

- 開催日時 平成27年10月20日（火） 午後1時半～午後3時
- 開催場所 研修室
- 出席者 塩田町長、後藤教育長、香川県教育委員会義務教育課長 矢木澤課長
熊坂委員、岡田委員、黒木委員、岡本委員
- 同席者 **【町職員】**
松本副町長、松尾副町長、空林総務部長、坂東教育部長、松田社会教育課長
後藤子育て共育課長、高橋教育指導室長
【教育関係者】
岩澤小豆島高等学校校長、龍田小豆島中学校教頭、大橋池田小学校教頭
石田星城小学校教頭、日向安田小学校教頭、川井苗羽小学校校長
安藤園長（星城・安田・苗羽幼稚園）
川口園長（旭・福田幼稚園、内海保育所橘・福田分園）
中多小豆島こどもセンター園長、増田小豆島こどもセンター所長、
大岡内海保育所所長、慈氏草壁保育園園長
- 傍聴者 17名
- 事務局 4名

【内 容】

[塩田町長] 挨拶

今回の総合教育会議では、香川県教育委員会義務教育課長の矢木澤課長より義務教育の現状と課題についてお話しいただく。矢木澤課長は、広島県出身で文部科学省へ勤められ、昨年香川県に勤めることになり幅広く活躍されている。

[矢木澤義務教育課長] 挨拶

昨年香川に来て、一番初めに訪問した学校が小豆島の小学校、中学校であった。本日は、義務教育の現状と課題について話をするが、香川県義務教育課としての考えと国の大きな流れの中でどういった位置づけになるのかをあわせて紹介をしていきたい。

文科省の中央教育審議会で、次の学習指導要領の改訂に向けて議論をしている教育課程特別部会における論点整理の中で、いくつか取り上げて話をする。まず、資料に沿っていくが、新しい時代と社会に開かれた教育課程において、将来の変化を予測することが困難な時代を前に、子供たちには、現在と未来に向けて、自らの人生をどのように拓いていくことが求められるのかということから書き出しが始まっている。将来の変化を予測する

ことが困難な時代とはどういったものかという、子供たちの65%は将来、今は存在していない職業に就くと予測するとアメリカの某教授の分析がある。これが、どれほど信憑性があるのかはわからないが、数字ではなく確かに子供たちが大人になって、今存在していない職業に就く可能性が大きいかもしれない。例えば、小豆島で今ある産業の中で、どうやって引き継いでもらうか、どうやって発展させていくか、この島のこれからを切り開いていくときに、今全く考えていない職が出てくる可能性がある。また、今後10年～20年程度で、半数近くの仕事が自動化される可能性が高いという予測があるが、この自動化されるイコール働き口が減るというイメージがどうしてもあるが、一方で今存在する職業にとられるよりは、今存在しない職業がこれからの子供たちにはあるのではないか、このようなことを念頭に、今どういうふうな子供を育てていくのか、どういう大人になってもらいたいのかを考えていくことで物語が進んでいくのではないかと思う。

次の学習指導要領というのは、学校で教える内容のエッセンスのようなものであるが、ある意味、大人から見て子供に身につけてほしいもののエッセンスでもある。そのエッセンスを考えると、子供がどんな将来をいきていくのだろうかをみせる必要があるだろうというところが、この論点整理の考え方である。そこで、どういうふうな子供を求めようのだろうかというところで、これからの子供たちには、社会の加速度的な変化の中でも、社会的・職業的に自立した人間として、伝統や文化に立脚し、高い志と意欲を持って、蓄積された知識を礎としながら、膨大な情報から何が重要かを主体的に判断し、自ら問いを立ててその解決を目指し、他者と協働しながら新たな価値を生み出していくことが求められるという大きな考え方がある。その中の、膨大な情報から何が重要かを主体的に判断するというところで、全国の学習状況調査の際に香川県の子供たちはもっといろんな情報の中から、必要な情報を選び出していく力を伸ばすことができるのではないかと話をした。国の大きな課題ではあるが、このような点は香川県の現場においても課題としてあるのではないかと思う。

次に、育成すべき資質・能力と、学習指導要領等の構造化の方向性について、教育課程について、知識の内容を体系的に示した計画に留まらず、それを使ってどのように社会・世界と関わり、より良い人生を送るか、までを視野に入れたものとして議論することが必要であるとある。この大きい話を踏まえて、各教科の本質的意義とはどういったものなのか。各教科等をなぜ学ぶのか、それを通じてどういった力が身に付くのかという、教科等の本質的な意義に立ち返って検討する必要がある。教科等における学習は、知識・技能のみならず、それぞれの体系に応じた思考力・判断力・表現力等や情意・態度等を、それぞれの教科等の文脈に応じて育む役割を有している。各教科等の在り方や、各教科等において育成する資質・能力を明確化し、この力はこの教科においてこそ身に付くのだといった、各教科等を学ぶ本質的な意義を捉えなおしていくことが重要である。これを踏まえて、今アクティブラーニングということが各教科に取り入れられている。これは、どちらかと言えば、各教科でこそ身に付ける力ではなく、横断的に付ける力を育むものであり、本県だけでなく全国的に取り入れられているものである。アクティブラーニングは、手法は決まっているが、中身はどういったものなのか、ずっと議論されており、次の学習指導要領を考えていくうえでも議論されている。指導法を一定の型にはめ、教育の質の改善のための

取り組みが、狭い意味での授業の方法や技術の改善に終始するのではないかといった懸念があり、本来の目的を見失い、特定の学習や指導の「型」に拘泥する事態を招きかねないのではないかと指摘を踏まえての危惧と考えられているとあり、これは我々現場でも国レベルでも議論されているところである。先日、学習指導要領を策定している教育課程課のほうも、昨年と内容が変わってきていると感じたのは、アクティブラーニングによる授業改善ということが言われていたが、本年はアクティブラーニングの視点からの改善と説明がされた。これは、次期改訂が学習・指導方法について目指すのは、特定の型を普及させることではなく、アクティブラーニングの視点に立って学び全体を改善し、子供の学びへの積極的関与と深い理解を促すような指導や学習環境を設定することにより、子供たちが力を身に付けていくことができるようにすること、具体的な学習プロセスは限りなく存在し得るものであり、教員一人一人が、子供たちの発達の段階や発達の特性、子供の学習スタイルの多様性や教育的ニーズと教科等の学習内容、単元の構成や学習の場面等に応じた方法について研究を重ね、ふさわしい方法を選択しながら、工夫して実践できるようにすることが重要であるとあるように、文科省自体がアクティブラーニングは様々な方法があることを明確に示し始めている。では、どういったことがアクティブラーニングになるのか。まず、習得・活用・探求と言う学習プロセスの中で、問題発見・解決を念頭に置いた深い学びの過程が実現できているか。2つ目に、他者との協働や外界との相互作用を通じて、自らの考えを広げ深める、対話的な学びの過程が実現できているかどうか。3つ目に子供たちが見通しを持って粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる、主体的な学びの過程が実現できているか。こういったことが出来ていることが、アクティブラーニングであって、間違っても型にはめて行うものではない、という国の議論がある。こういった国の議論を踏まえて作成した訳ではないが、県の義務教育課で先日リーフレットを作成した。昨年から香川県のいろいろな学校を視察し、こうしたらもっと改善するのではないかと考えを踏まえて、この授業改善のリーフレットを教職員に配布した。1つ目に、「課題設定」少し困難な課題を取り入れ「挑戦」する態度を育てているか。「すぐには分からない。でも、粘って取り組めば何とかできるかも。」子供自身が粘れるだろうかということとは、義務教育課においても日々話しているところである。ここ最近の県の学習指導状況調査で、最後まで努力して回答しているといった回答をしているが、一方時間が足りないのではなく、時間が余ったと回答している。これは、間違いなく頑張っているが、おそらく粘り強さが足りないであろうと考える。授業の中で取り組もうとすれば、子供たちがもう少し粘ってみようという気持ちを起こさせるものが重要である。例えば、情報選択で問題を解くのに必要な情報はどれだろうと考えさせる場を与えることもひとつの方法である。2つ目に、「見通し」方法に加えて、結果も予測させているか。与えられた課題、自分が挙げた課題にせよ、その課題がどういう結末になるのだろうか、始めに予想してみる。単なる見通しだけで「作業」になってしまわないようにすることが重要である。3つ目に、「言語活動」相手意識をもたせて、発言させているか。自分や相手の考えを表明し合うだけでは意味がなく、それを広げたり深めたりすることに意味がある。例えば、大人になって仕事をする際に、上司と意見表明をし合うだけでは話が進まないわけであって、お互いが寄り添えあえるような、考えを広げ深めあうことが出来なければ、

この言語活動に代表される、アクティブラーニングにならないであろう。4つめに、「振り返り」その授業で自分が何を学び、どう変わったかを実感させているか。これは、見通しと関わっており、自分が見通しで予測をしたことが、結果的にどうなったのか、まとめとして振り返るだけでなく、自分が何を学び、どのような変容があったのかを実感できるような工夫が大切である。このような振り返りができると、学んだことを次に生かそうとする、学習意欲もはぐくまれる。そして、最後に「授業全般」その授業で子どもに「身に付けさせたい力」が書けるか。その日の授業、その教材でいったい何を子供たちに身に付けさせたいかを設定できれば、その流れに応じた授業展開ができると思う。何となく終わり、何も身に付かない授業になってしまうことに懸念しており、県でも課題としてしているところである。

いろいろな方法、取り組みがあるかとは思いますが、小豆島においてもこのように取り組んでもらえたらありがたい。

[塩田町長]

ありがとうございます。では、教育委員から意見等あればお願いしたい。

[後藤教育長]

アクティブラーニングは、もともと高等教育の改善のために取り組まれたものであった。どうしても、アクティブラーニングはひとつのかたちだと考えてしまうが、矢木澤課長の話聞いて、いろんな方法があるということであったが、例えば〇〇学校スタイル、〇〇先生スタイルといったかたちがあってもいいということであろうか。

[矢木澤義務教育課長]

後藤教育長が言っているように、学校や先生のそれぞれのスタイルがあってしかるべきだと思う。これは、ひとつの手段であるので本来の目的は何かと考えた時に、子供たちが大人になり、言われたら動けるが、言われないと動けないようになってしまっただけではあまり生産的ではなく、新しい価値を見いだせない。イノベーション、革新を言われ始めたのは最近であるが、今までの産業を、同じように繰り返しているだけでは、日本は後進国に抜かれていくという危機感から新しい価値を生み出していかなければならない。そのためには、今までのこれが最新技術であるからこれをやっておけば良いという方法では対応できないであろう。そういうところから、アクティブラーニングというものが取り入れられてきたのであろうと思う。子供たちに身に付けさせたい力は何かというところが重要である。いろいろな方法があってしかるべきだと思うが、それを先生方で共有し、それぞれ先生の手法があるが根の部分は繋がっているのだ、ということを示せるよう、先生方で意思疎通しそれぞれが発展できたらいいと思う。

[熊坂委員]

学習指導要領の改訂が10年ごとになされているが、これは改訂の改訂なのか、本質的な改訂なのか。現在の世の中、速い速度で変化している。変化していく世の中で教

育のあり方をどう考えていくのかが大事なことである。子供たちは、必ずしも勉強をすることを好きではない。ただ、強制的に勉強をさせなければいけない部分もある。不易流行という言葉があるが、この不易なものをどれだけ大切にしていけるべきであるか、流行ばかり追いかけているのではないかと、という反省がどこかにあると思う。その兼ね合いが大切なのではないかと。どんなに時代が変わっても、本質的な部分で大切なことは変わらない。子供が求めるものというより、社会が求めるものが学習指導要領に対していろんな施策が行われている。勉強を強制される子供のジレンマと国としての策とをどうやって掛け合わせていくか調整をとっていくのか。新しいことを取り入れながらも、本質的なところは押さえていかなければならないと思う。

[矢木澤義務教育課長]

学習指導要領の改訂と言っているが、大部分はぶれていない。ただ、その時々で、我々が重視しなければいけないのではないかとこの部分が出てくる。その部分で、近年重視すべきところは、先程言っていた新しい価値を見出していかなければ日本が沈んでいってしまうという危機感がある。これは、今までにもあったと思う。それは今までは、価値を選び取るだけでよかったものが、新しく作り出していかなければならなくなっている。一方で、本質的な部分では、文科省の資料にもあった、「蓄積された知識を礎としながら」というところは外すべきではないと考えている。そして、学校自体、学校で教えるということにどういった価値があるのかということ、個人的な意見ではあるが、子供のうちはまだ視野がどうしても狭いものであり、その時一生懸命考えていると思っても狭い中で考えたものでしかない。それを、成長してもう少し広く高いところから見て物事を考えられるようになる。学習指導要領は大人自身の良心のかたまりであると信じており、子供たちに、こういう大人になってほしいという願いを込めて作成している。ただこの願いは、大人ほどの視野をもっていない子供たちには、まだ理解できないものであると思う。文科省においても、香川県としても不易と流行というものを大切にしていきたいと思っている。

[岡田委員]

スマートフォンが普及しており、高校生等も登校しながら触っていたりする。家庭学習の時間が増加したと出ているが、情報化といいながら、それが子供たちの中でどれだけ生かされているのかと考えさせられる。また、学校と家庭、地域と一緒に子供たちと進んでいかなければならない。現在いろいろな情報が飛び交う中で、学習時間とその他の時間設定が重要になってくると思う。そこには、学校における教員からの指導も必要になってくるかと思う。教育委員として、小豆島町の学校を訪問しているが、その授業の中で課題設定から振り返りまで、時間の偏りはあるが、どの学級も出来ていたと感じている。

[矢木澤義務教育課長]

小豆島町はよく研究されているので、とても熱心に取り組んでくれていると昨年自分が訪問した際にも感じたところである。香川県全体をみても、真面目に取り組んでくれている

ると感じている。今回改めて示した、授業改善は基本的なところであり、現場の先生方がこれにもうひとつそれぞれの段階で考えていくことができるのではないかという思いで、作成したところである。課題設定の中に、「子どもがある目標を実現したいと思い、その目標の実現のために多少の困難さが伴うとき、その事象は子どもにとっての課題となる」とあるが、これは学習指導要領の中からとった一文である。課題の設定は、子ども自身がするのが一番であるが、先生たちが設定してもいいものであると思う。それが、担当する子供たちにとって、挑戦するようなものになっているかどうかが重要である。この5つの視点を現場でもう一步取り組む姿勢に役立ててもらえたらと考えている。

また、小豆島において、家庭や地域、学校を含めて子供たちのことを考えていくことに取り組んでいることには本当に感謝しているところである。学校においては、1学級に担任のみではなく、他の先生の目も、入れてもらうようお願いしたところである。子供同士の学び、仲を深めると同時に、先生方の中でも同じように深めてもらえたらと思う。学校や地域ができることで、アナログではあるが、顔を合わせる場を作り、地域の人や保護者たちが子供を覚えてくれる関係を作っていくことはとても大切なことである。

自分の体験談にはなるが、勉強をするのに睡眠時間を削ることで時間を作っていたことがあるが、他の余分に使っている時間を勉強時間に費やすことで、睡眠時間を削ることはない。大人になり社会人になれば、限られた時間の中で仕事をしなければならないが、それができなければ、社会人として成り立っていかなくなる。このような睡眠時間や大切な時間を保つように、家庭や地域の皆で取り組んでもらいたいと思う。

[黒木委員]

現在、幼稚園は文科省、保育所は厚労省と各省庁に管轄が分かれている。現場においては、この2つが分かれているとなかなかやりづらい部分が出てくるように思う。私としては、いずれ1つの省庁になってもらえれば現場にとってはやりやすくなるのではないかと思う。

[塩田町長]

厚労省に勤め、保育所の担当課に就いていたことがあるが、黒木委員の意見とは逆で、現場が2つ分かれているから中央省庁は一緒にできないのだと思う。

[矢木澤義務教育課長]

現場の声、保護者たちの声もあると思うが、1つにすることで解決することでもないと思う。いろいろな手法でやっていくことが大切なのではないか。2つに分かれていても、お互いに顔を突き合わせることでこれを解消していくことが重要であると思う。

[岡本委員]

私の住む安田地区の安田小学校の校庭にあるスローガン、やり抜く、強い子、進んでやる子、誰とでも仲良くする子、これこそがアクティブラーニングではないかと話を聞きながら思っていた。安田だけではなく、他の学校もそれぞれのスローガンを掲げて頑張っ

いる。その中で生徒に考えさせる授業が最近増えてきたのではないかと思う。そして、この授業改善の5つの視点を示し、授業のハードルを少し上げることによって、現場の先生方も大変になるかと思う。様々な負担があるが、先生方の現場の負担を減らして、授業に集中できるような形で進めていければと思う。また、65%が今存在しない職業に就くとあったが、今の大人たちが世界に対して個々の発言力が小さいことを文科省は考えているのだろうか。これからのグローバルな時代に対応できるよう、「学びのときめき」で生徒のスキルアップをして、ひとりでも強いリーダーシップを持つ子供を育てていけるようなことになればと思っている。

[矢木澤義務教育課長]

先生方は頑張ろうと思えば、それなりに負荷がかかってくるかとは思いますが、教員という仕事は、先生方にとって、やはりやりがいのあるものであってほしい。子供が先生の授業は役に立つと思えば、何かを得るものであると感じること、子供にそういった目を持たせることができるようなものであってほしい。そのうえで、先生方には負担をかけるかもしれないが、頑張ってもらいたい。

[塩田町長]

とても貴重な意見交換になったと思う。

世の中はものすごい勢いで変わっており、国際的にやりとりしないといけない時代になっているので文部科学省や県の教育委員会、小豆島町の現場でやっているコミュニケーション能力を向上させることやアクティブラーニングは全部正しいと思うのでどんどん伸ばして行ってほしいと思う。

その一方で私個人のことを考えると、小学校・中学校・高等学校と手を挙げて発表することが大嫌いだった。また、大学のときはゼミが嫌いで途中から行かなくなった。しかし、テクニックをもって話せるし、膨大な情報からこれが小豆島町にとって大事な情報だということも判断できる。どこでその力を養ったのかと考えた。おそらくではあるが、課長がところどころでおっしゃっていた「アナログの世界」で身につけたのだと思う。

厳しくて優しい先生、父、母、周りにもいろんな先輩、お兄ちゃんやお姉ちゃんがいて、職場ではご存知の通り霞が関にはいろんな先輩がいて、ものすごくもまれた。地域社会と職場でもまれることによってコミュニケーション能力を身につけたのだと思う。

もし自分が今、小学生だったら不登校になると思う。なぜなら、今は地域社会でもまれるところがなくなっている。だからこそ今の教育としてアクティブラーニングをすることが正しいと思う。放っておいたら、小豆島の子供たちは一切コミュニケーション能力やたくましい精神力を身につける場がない。学校の先生が授業の中で全部するというのは厳しい。学校と地域社会と家庭の総合力になってくると思う。デジタルとアナログ両方が必要であると今回の会議で感じた。

[龍田小豆島中学校教頭]

私は理科の教員であったが、今日の話聞いて、自分が行ってきた授業でアクティブラーニングができていたかを考えました。理科や科学の実験はアクティブラーニングそのものだと思う。用意周到にしてわざと失敗させることも、子供たちにとって学ぶことができたのではないかとも思う。とても考えさせられたところがあった。ありがとうございました。

[矢木澤義務教育課長]

龍田教頭の言うとおりに、理科の学習指導要領を読むと、やはりアクティブラーニングそのものである。その手法はいろんなやり方や形があってもいいと思う。先日鳴門教育大学を訪問し、その発表のなかで、小学生に算数の足し算の授業をしていた。よく現場で使われている付箋紙を配って、足し算の答えを導かせようとしていた。その教科の目的は、まず数学ができることと、自分で考える思考力を高めることであった。そこで大学院生が気づいたことは、付箋紙を渡したことで方法論を限定してしまい、これ以外の方法を考えることを奪ってしまったことであった。なぜこれに気づいたかという、ある子が配った付箋紙を使わず、自分で紙に書いて持ってきたからであった。思考力を高めようと思い、便利であると準備したものが、もしかしたらこれを用いることで方法を限定してしまったのではないかといった事例もある。準備することはメリット、デメリットどちらも有りうることなので、その意識をもっていけば十分ではないかと思っている。

[日向安田小学校教頭]

アクティブラーニングは始まった頃には、学習を主体的にするために、グループで話し合う活動を入れることや、子供たちが外で学習する場を設けること、子供が先生役をして教えることをするなど、形態や方法ばかりで何か違うと感じていた。一番大事にしなければならないのはやはり、主体的な学びになっているか、子供自身の問題解決になっているかというところであると思っている。授業の中で一番大事にしなければならないのは、課題設定の段階ではないかと思う。課題設定が子供自身の生活に結びついており、キャリア教育と絡めて考えると、今の自分の生活にどう繋がってきているのか、将来の自分の姿にどう繋がるか、という視点で課題をどうとらえられるか。そういう課題設定が出来ているか。課題を与えられるのではなく、子供の必要感から課題が作られること。これは教科によっては難しいところがあるが、それを総合学習や特別学習の時間に課題設定が出来ることを大事にしていくべきではないかと思う。

[矢木澤義務教育課長]

手法に全体的に目がいつているのだとは思いますが、やはり本来の目的にかえっていかればと思っている。課題設定は指摘されていたように、本当に大事なところで、子供自身の主体的な設定ができれば、それが一番ではあるが、全てがすべてこの通りに出来るわけではない。教科によってはやはり難しいものもあるので、その部分は先生が導いて始めればいかと思う。

[塩田町長]

ありがとうございました。次回は11月27日13時半より行う。町民の代表の方から教育についてのご意見をいただく。推薦の方と公募の方からうかがう予定にしている。